

送別の辞

越野 武教授の退職にあたって

木村 英明

文化学部の越野 武教授は、二〇〇八年三月末日をもって定年により退職される。

先生は、二〇〇一年四月、北海道大学を定年退官されてすぐ札幌大学に赴任されている。当時学長をされていた山口昌男先生に同じく当時学部長の任にあった私が先生を紹介する機会があり、お二人はすっかり意気投合されたらしく、本学部の同僚としてお迎えすることがとんとん拍子に決まった。まさに出会いの妙と言えようか。

一九六〇年に北海道大学工学部建築工学科を卒業された後、一時民間の建築設計事務所勤務された時期もあると聞くが、母校の建築工学科建築計画学講座に戻り、爾来、研究と教育の道一筋に歩まれてきている。一九八九年には、『北海道における初期洋風建築の研究』により工学博士を授与され、二〇〇一年、退官とともに北海道大学名誉教授の称号も取得されている。

専門が考古学、しかも得意とするのははるか悠久の旧石器時代、この門外漢の私が、先生の研究業績を正しく評

するのは難しいが、詳しくは別掲の業績リストに譲ることとして、その一端を紹介してみたい。

先生が一貫して取り組んできた研究対象は、北海道の明治期以降に導入されてくる洋風建築である。しかもその研究の真髄は、導入と展開の過程、及びその歴史的意義を、豊富に遺存する建築、あるいは建築遺構を詳細に実測調査し、徹底的に渉猟された文献史料ともつきあわせ、さらには復原をなしつつ実証的に考察していくスタイルにある。北海道における洋風建築の移植・展開の過程については、当時一応の研究水準に達し、その評価も定着していたことが認められているが、先生が研究の集大成としてまとめられた「北海道における初期洋風建築」は、従来の空白部分を補い、いっそう密度の濃い、レベルの高い北海道初期洋風建築像を提示した研究として高い評価を受け、一九九一年に日本建築学会賞を受賞されている。

要約すると、そこでは、初期洋風建築の導入過程について、開港場函館におけるヨーロッパ建築との遭遇の様相を取り上げ、文久三年竣工の在函館イギリス領事館などを例にして、建築における異文化接触の興味深い様相を明らかにし、次いで開拓使函館支庁および開拓使本庁について、復原考察を加えつつ、建築的特質と歴史的意義について述べられている。続いて明治中後期における初期洋風建築の展開を取り上げ、開拓使後の洋風建築の展開、地方への伝播と民家や市街地建築などへの浸透について、函館・札幌・小樽の都市部と日本海沿岸地方の各地域に分けつつ論じられている（「学会賞推薦理由書」より）。棟梁建築家によつて築かれた初期洋風建築は、明治時代中期以降になって北海道の市街地建築物や民家のレベルにまで浸透していく過程で定着していったのであるが、これまで、官営の大型建築物や正規建築家による華やかな建築物に目を奪われがちな研究動向を、庶民の日常生活に深くかかわる民家のレベルまであまねく光を当てた研究視点、そして何よりも徹底した実証的研究が新たな研究

世界を切り開いたように理解される。

先生は、一九三七年に札幌市にお生まれになっている。札幌生まれの札幌育ち、生粋の「さっぽろっこ」である。私も同じ札幌生まれ、道立札幌西高校を同窓とする六歳違いの後輩にあたる。互いの生活圏がほとんど重なりながら少年・青年時代を過ごしていたことになるが、明治時代・大正時代の建物がそこに残っていた時代である。それだけに、先生が編者で北海道新聞社から刊行された『北の建物散歩』は、私の愛読書として時折利用させていた。本書には、先生の研究成果があちこちに散りばめられており、私にとっても思い出深い歴史的建物が収載されている。また、札幌ばかりでなく、小樽の歴史的建造物にも多くのページを割いており、その他石狩・空知・胆振管内など周辺のものもあわせ、二〇〇を越える建物が収録・紹介されている。しかも、その構造的特徴、歴史的位置付けなどが、カラー写真とイラスト、そして所在地・交通手段の解説もまじえながら分かりやすく紹介されている。そもそもは、北海道新聞に七一回に渡って連載され、大変な好評を博したコラムを出版化したものである。

横綱クラスの建物は置くとして懐かしいところでは、開拓期から保存されてきた自然林の中にひっそりと佇む「旧札幌博物場」がある。ボストンの建築家ベートマンの設計で、開拓使によって一八八二（明治一五）年に建てられた、建物の正面を二階建てにした中世ヨーロッパの教会風の建物であるという。現在の植物園内にあつて、国の重要文化財に指定され、考古学・民族学の貴重な資料が収蔵されている。

都心に立ち並ぶ明治期の終わりから大正期にかけて流行した軟石（石山産）造りの建物を通して、モダンデザインへの動きを先生は説くが、その多くはすでに消失、離散している。大通り公園の西端、旧控訴院（高等裁判所、現

札幌市資料館）は往時の姿を止めている数少ない大型の建物であるが、薄野の現・料亭「杉の目」を好例として、今なおそこに石造り倉庫の現代的利用の例を見ることができるといえる。

明治末に森源三が建てた中世の西欧城郭風の木造三階建て和洋折衷住宅こそ残されていないが、今は知事公館、昭和初期に立てられた「旧三井札幌別邸新館」は、白壁を区画・縁取る赤色の柱や梁などが印象的で、中世の東欧や北欧の街角にでもいる気分になせってくれるとても美しい建物である。北海道立近代美術館の東隣り、自然の森の中にひっそりと佇んでいる。通称三井クラブ、昔こっそり中庭に入り込んで遊んだものである。

西岡四条一丁目に「ろいず珈琲館」、その建物の魅力に惹かれて立ち寄った人も多いのではと思うが、戦後間もなくに建てられた比較的新しい建物であるが、西岡名物、レンガ作りの元りんご用倉庫である。月寒在住の長浦数男さんが、野幌から二万個を超えるレンガを馬車で運びながら作ったという。

著書『北の建物散歩』を通して、街の片隅にひっそりと埋もれた、北海道の歴史を秘める素晴らしい建物があちこちに残されていることを知る事ができるが、本書をハンドブックにのんびりと探索するのも一興であろう。

先生の業績は、単に新しい研究世界の開拓にとどまらず、時には移築、あるいは失われてしまいそうな貴重な建物を、行政に働きかけ、保存を訴え、止むをえず失われる場合も、詳細に記録した図面などを元に、復原・再現するという分野において、大きな役割を果たしてきたことが知られる。北海道開拓の村などの展示品にその努力の跡をうかがうことができる。

それ故、その専門的研究が期待され、北海道文化財保護審議会委員・会長、札幌市文化財保護審議会委員・会長、小樽市歴史的建造物等保全審議会委員、函館市伝統的建造物群保存対策協議会委員、北海道遺産選定専門委

員・委員長など数多くの公職を歴任されている。そもそも私が先生と最初にお会いしたのは、そのうちのひとつ、札幌市文化財保護審議委員会の委員を務めていた頃で、一九九五年のことと記憶している。審議委員のみなさんと、豊平館や八窓庵、時計台、旧永山武四郎邸、旧簾舞通行屋・黒岩家住宅などを先生の詳細な解説付きで案内していただいたのも、今は懐かしい。

ところで、先生は、工学部出身らしく建築設計士（一級）の資格をお持ちであるが、すでに紹介したとおり専門は建築史、しかも研究の対象は北海道の初期洋風建築である。それに対し私の専門である考古学といえば、おそらく人類の誕生、縄文時代などなど、悠久の先史時代を扱う学問という理解が通り相場で、歴史考古学、産業考古学といった比較的現代に近い時代をも扱うことについてはあまり知られていないに違いない。私が、札幌大学に助手として勤めはじめて間もなくの頃、「開拓使札幌本庁舎（跡地）」発掘調査が行われることになったが、現場責任者の一人としてかかわったことがある。文献資料に記録が残されているもののその場所を特定できない、何とか特定できないかというわけである。結果は、見事と言ったら少々手前ミソになるが、その基礎部を探し出し、具体的な場所の特定はもちろん、これまで明かにされていなかった基礎部の構造や図面と微妙に異なる実際の部屋割りなどを明らかにし、調査は大成功を収めた。その建物の位置と広がりには、北海道庁の前庭部（東側）、赤レンガ庁舎の北側に分かるように地上標識をもって今も残されているし、北海道開拓の村に当時の建物の勇姿がそっくり復原され、一般に公開されている。北海道のこの分野において、先生の専門とされる建築史と考古学とが共通の目的をもって行われた最初の学際的研究であり、両学問が極めて近縁な関係にあることが理解されよう。学問的近縁さも手伝ってことその他、先生には親しくご指導をいただいた。

先生は、本学に移られてから毎年のように、奥様とともに海外旅行に出かけておられていた。自分の研究をさらに広げようという意欲的な旅行で、帰国後にそのお土産話を聞くのをいつも楽しみにしていた。その一端を、私が編者で毎年刊行している『Museological Atlas』（博物館学芸員資格取得特別課程の年報）に「野外博物館3題」として特別寄稿していただいたこともある。二〇〇三年夏、私がロシアのサンクト・ペテルブルグ（ロシア科学アカデミー物質文化史研究所、及びエルミタージュ美術館）に留学していた折、先生ご夫妻がキジ島から夜行列車「カレリア」号でサンクト・ペテルブルグにやって来られ、街を案内したことがある。珍しく、特別に熱い夏の日であったと記憶している。先生にとっては、サンクト・ペテルブルグ、とりわけエルミタージュ美術館の訪問は長年の夢であつたらしく、夢中でご愛用のカメラのシャッターを押す姿は、さすが専門家、その執念を実感させていただいた。エルミタージュ美術館、かつての冬宮の建物の全体をどうしても写真に収めたいといつて、宮殿広場のはるか彼方にまで後退していった時、奥さんが「こうなると彼は止まらないの」と諦め顔に話していたのを、昨日のように思い出すことができる。夜には、サンクト・ペテルブルグで著名な、ソ連時代から営業が続くネフスキー大通りにあるレストラン「チャイカ」で、妻ともども夕食をご馳走になった。節約が続いていた留学生活、久し振りの贅沢に先生ご夫妻が救世主のようにも思えたひと時であった。慌しいご旅行だったらしく、翌日には旅立たれて行かれた。息子さんがロシア研究者。帰国されてから妻とともに自宅に招待され、息子さんをまじえながらのソ連時代の経験談、苦労話に時間を忘れるほど盛り上がったのも、今は懐かしい。

先生の旅行（海外ばかりでなく、国内も含めて）は、研究のためだけでなかったことを後に知る。本学にお迎えするにあたって、学部の講義科目「比較建築文化論」、「日本文化史」、そして大学院科目「表象文化史特論」など

をお願いすることとしたが、私立大学、それも畑違いの文科系の学部故に、専門の建築史はともかく、いくらか無理なお願いもしたように思う。それでも、愚痴るでもなく、むしろ学生のために最新の情報を伝えられなければ教員の存在理由はないと言いながら、教材作りを目指して旅行されていたのである。教育熱心については、受講生みんなが口々に語るところで、あらためて紹介するまでもなからう。先生の指導のおかげで、北海道大学大学院博士課程に進学し、すでに研究者の道を着実に歩み出している者もいる。また、慣れない（と私が推察）学部の雑務も率先して引き受けられ、学生の指導に当たっていた。

札幌大学での在職は、一〇年にも満たない短い期間ではあったが、若い世代の育成に大きな役割を果たしたことは誰しもが認めるところであるし、学部創設まもない困難な時期に文化学部の確固たる礎を築くのに多大なる貢献をなしたことは疑いない。

これまでの先生のご労苦に心から感謝申し上げますとともに、今後は、雑務から開放され、ご健康にご留意され（どうも万年青年にも思われますので、それほど心配はなさそうですが）、ご夫妻でゆつくりとご旅行を楽しまれるようお祈りしております。